アイヌの他界観に就いて

アイヌ宗教の基盤—宇宙構成観—死者の国—死者の国と現世との同一なる点—死者の国と現世との異なる点—死者の国への道—他界行説話—他界行説話の分析—従来の諸文献に見られるアイヌの他界観—筆者の見解—終わりに

久保寺　逸　彦

〔**アイヌ宗教の基盤**〕 アイヌ宗教の基盤は宇宙のあらゆる事物に霊魂が内在し，その霊魂は肉体乃至形骸を遊離して存在するとする所謂 *animism*（精霊崇拝）にある。この基盤に立つアイヌの宗教では，環極北採取狩漁民族に見られる *shamanism*（巫呪信仰）の色が濃く，巫人に依る卜占・呪術・託宣などが重んじられた。

〔**宙構成観**〕 アイヌに依れば，宇宙は立体的に天界〈Kanto〉，地上の人間界，〈Ainu-moshir〉，地下の死者の世界＝他界〈Pokna-moshir〉の三界に分かれ，天界は更に上天〈Rikun-kanto〉，下天〈Ranke-kanto〉，に，他界は更に，上層に在って，「普通の死者の赴く下界〈Pokna-moshir〉」とその下層に在って，悪人や魔神が罰せられ放逐されて堕とされていく「陰湿の下界〈Teine-pokna-moshir〉」に細分される。アイヌの神聖数 *sacred number* は，6〈iwan〉であるため，天界に六重の天〈iwan-kanto〉或はその倍の12天〈tu-ikashma-wan kanto〉を想定している如く，地下の「死者の国」も亦，通常6層に分かれるように考えられている。道南の日高・東静内（旧名，Mo-pet「静かな川」或は，「小川」の義）の故佐々木飛吉 Operekun 翁に依れば，(1) Mun-e-san-pet-moshir（塵埃の流れ出る川のある国），(2) Toi-e-san-pet-moshir（泥の流れ出る川のある国），(3) Kunnepet-moshir（黒く濁った川のある国），(4) Kamui-sak-moshir（神のいない国），(5) Wakka-sak-moshir（水のない国），(6) Ni-sak-moshir（木の生えていない国）があり，更にその下に，Teine pokna-moshir（濡れてじめじめしている国，陰湿の国）と呼ぶ世界があるという。

（**死者の国**）併し，普通には，死者の赴く「地下の国」を Pokna-moshir（下方の国）と呼び，更にその下にある最下底の国を Teine pokna-moshir, Teine pokna-shir, Teine-moshir と呼ぶ。

* J. Batchelor の「蝦英日三対辞典」や The Ainu and their Folk-lore などに Teinei と綴ったのは誤り。

Teine pokna-moshir は暗黒陰湿の世界で，仏教の所謂地獄 *Naraka* に当たり，善神 Peker-kamui との戦に敗れた魔神 Nitne-kamui の霊や，悪業によって罰せられた人間の魂などが呪われて堕ちていく世界であり，又，人間に危害を加えた悪熊なども呪われて逐いやれて赴く所でもある。一度，ここに堕とされたものは，神でも人間でも，永遠にここに止まり，他の世界へ復活再生出来ないものと，考えられていることは，アイヌの生活や信仰の規範ともいうべき「神謡 Kamui-yukar」や「聖伝 Oina」「神々の起原譚 Kamui-upashkuma」などにもよく現われている。普通の死者の赴く Pokna-moshir は一種の kamui-moshir（神の国）でもある。

Pokna-moshir は，他の多くの民族の神話や宗教観に現われる「死者の世界」——例えば，ギリシアの *Tartaros*, 北欧の *Hel-heim*, 仏教の *Naraka*（地獄），日本神話の「黄泉（よみ）の国」の様に，陰惨汚穢の忌避すべき暗黒界ではなく，「上方の国「Kanna-moshir」即ち人間界 Ainu-moshir 同様な光明世界で，青い山脈もあれば，川流れ，樹立茂り，海湛え，鳥歌い，獣走り，魚群れ泳ぐ所で，ギリシア神話の常春の楽土 *Elysium* の野さながらの世界を想わせるものがある。要するに，アイヌの「死者の国」は，この現世（げんせ）そのままを写象したものであり，死者の生活は人間生活の連続である点に著しい特徴がある。

「死」はアイヌにとっても，勿論恐怖であり，「死霊」は忌避追放すべき不気味なものである。然るに，何故に，「死者の世界」をかくの如く楽土として観じなければならなかったか，とまれ，かかるアイヌの他界（冥府）観は，宗教の発達段階から見る時，かなり進化したものに属するであろう。他の民族の神話や宗教では，例えば，ギリシアの *Hades*, ローマの *Pluto*, エジプトの *Osiris*, 日本の黄泉大神（よもつおうがみ）という様に，冥府神即ち死者の国を支配する神を想定しているのに，アイヌにはそれがないらしいのは，亦注目に価する。

その理由を筆者は次の如く推定する。

現世の人の国 Ainu-moshir 即ち北海道や樺太（サハリン）には多くの聚落 kotan が存在した，聚落を支配する者として酋長 kotan-kor-kur（〈村，持つ人），ottena（〈大人）と称する者があったが，諸酋長の上に立ち，アイヌの全民衆を支配する政治形体は，尠くとも，我々の知り得る限りのアイヌ民族の歴史の上では，往古にも存在しない。北海道の古称「蝦夷 *Yezo*」樺太の古称「北蝦

夷」も勿論アイヌに依る呼称ではなく，内地人がそこに住む人種の名 *Ezo* に依って名付けたものである。

* 北海道アイヌは北海道を Ya-un-moshir「陸にある国」「本州」と呼び，樺太を Rep-un-moshir「沖にある国」，千島列島を Chupka「太陽の上→東方の国」と呼ぶ。
* 蝦夷の語原についても種々あるが，アイヌ語の人を意味する古語 Emchiu の転訛，Emchiu>Emishi, Emchiu>Emjyu>Emzo とする金田一京助博士の説をとる。

北海道なる名称も，1869（*m.* 2）年8月，開拓使庁の建議に基づき，朝議で決定，改称したものであり，渡島（おしま）・胆振（いぶり）・日高・石狩等の11か国名も，86郡名も，その際，定められたに過ぎない。北海道アイヌは，単に，自島を Ya-un-moshir（陸にある国→本州）と呼び，樺太を Rep-un-moshir（沖にある国）として意識し，他の隣国（日本本土も含む）を，広く Sam-or-moshir（傍にある国→隣国）と呼んでいたに過ぎない。先に筆者はアイヌの「死者の国は」，現世そのままであることを述べた。死者は，この世界に赴いて，現世でなしたと同一の方法で，同一の条件で，集団生活を営んでいる。即ち，親子夫妻は一家を，同じ村人で一村を形成し，又，一つの川筋に住む者は，その川筋にいくつかの聚落をつくって生活を続けているものと考えられている。従って，「死者の国」でも聚落毎に酋長が存在しなければならぬ。川筋に依る聚落連合ということも，現世に於けるが如くあるであろう。併し，理論的には，「死者の国」全土を支配するもの，即ち「冥府の大神」という様なものの存在は許されないことになると，筆者は推論する。

〔「死者の国」と「現世」との同一なる点〕

「死者の国」へは，屍 kaisei から遊離した霊魂 ramat, ramachi, rai-tama-num だけが行き，そこで，再び元の形骸 kaisei を獲得して，元の人間の姿に復活し，夫婦・子供・老人という様に，一家揃って，現世そのままの様式の家屋 chise に住み，山にシカやクマを狩り，川にサケやマスなどを漁り，海にカジキやクジラ，アザラシなど獲り，コンブなども採る，山野に野草を求め，薪も採り，畑ではヒエやアワ，カブラ atane などを作るといった生活を続けているという。

死者を埋葬する際，生前使用した炊事道具，調度，愛玩品などを副葬する意味も，亦，老人や主婦が死亡した際，その *住家を焼却する風習の行なわれたことも，死後の生活は現世の生活の継続だというアイヌの考え方を考慮に入れずには，到底理解し得ないであろう。

* 之を，アイヌは，「死人に家を背負わせてやるのだ」と説明するが，よく，その観念を

表現していると思う。

〔「死者の国」と「現世」との異なる点〕

両者の相異する所は，次の五点にあるといえる。

(1) 死者の国の生活では，現世の生活と違って，悩み患うこともなく，苦痛を感じたり，病気したり，死ぬこともない。そこにあるものは永遠の生の享楽のみである。

(2) 現世は，一名 uwarí-moshir（出産し繁殖する国土）と呼ばれて，神 kamui, 人 ainu 共に子を産み栄えいく世界であるが，「死者の国」では，この世の連続として考えられても，出生繁殖ということは考えられない。人口の増加は，現世からの死者の訪れにのみ依って可能であり，人口の減少は，現世への再生に依るのみである。

(3) 時間の尺度を異にする。即ち世界の神話や伝説に多く見られる，神話学上の所謂 *Supernatural lapse of time in Fairy-land*（異郷に於ける時間の異常の経過）はアイヌにも見られる。死者の国の1日は，上方人間界の6日，1か月は6か月，1年は6か年に当たるという様にいわれる。

(4) 季節も，現世のそれとは反対（逆）になる。春は秋，夏は冬となるといった具合である。

＊ 十勝の音更（おとふけ）部落では夏に死んだ者を埋葬するには，輪樏（わかんじき） teshma を副葬する風があるが，現世の夏は，あの世では大雪が降る冬の季節であるから，死者があの世へ行っても不自由させぬ様にする為だという。（吉田巌氏「杖のみたま」〔民族学研究 VoL. 19-3, 4〕）

(5) 昼夜が反対になる。

他界の昼の時に送ってやらないと，死者は道に迷い，こちらへ戻る恐れがあるから，夜になって葬式を出す地方があるのも，この考え方によろう。

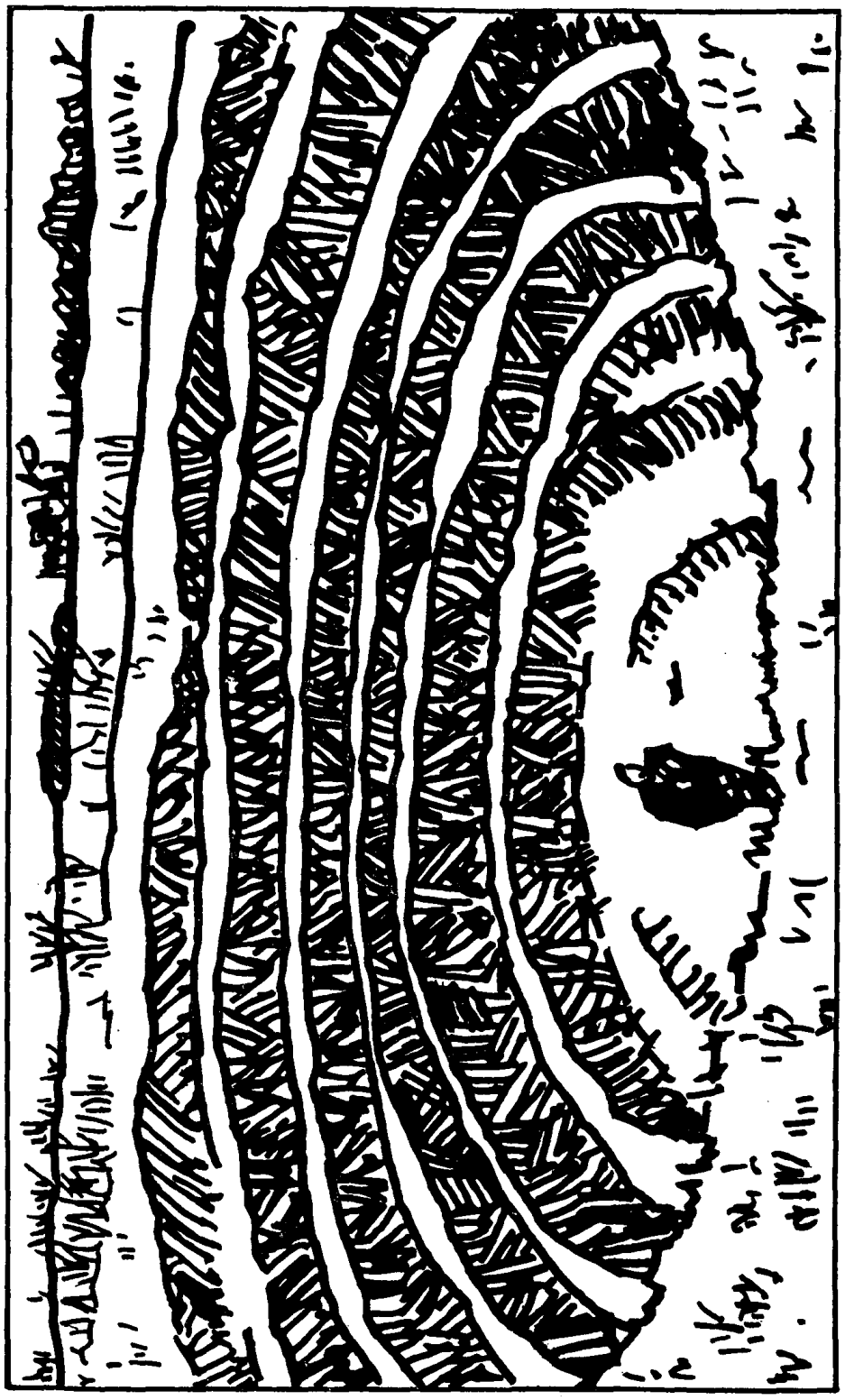
＊ 釧路国虹別スワン部落，大野とめ媼談

〔死者の国への道〕　現世と他界とを連絡する通路即ち死者があの世へ赴く路を意味するアイヌ語に，(1) ahun-paro（入る口），(2) ahun ru paro（入る路の口），(3) oman ru paro（行く路の口），(4) wen ru paro（悪い路の口，不吉な路の口），(5) o-pokna ru paro（そこから下界へ行く路の口）等の地名がある。

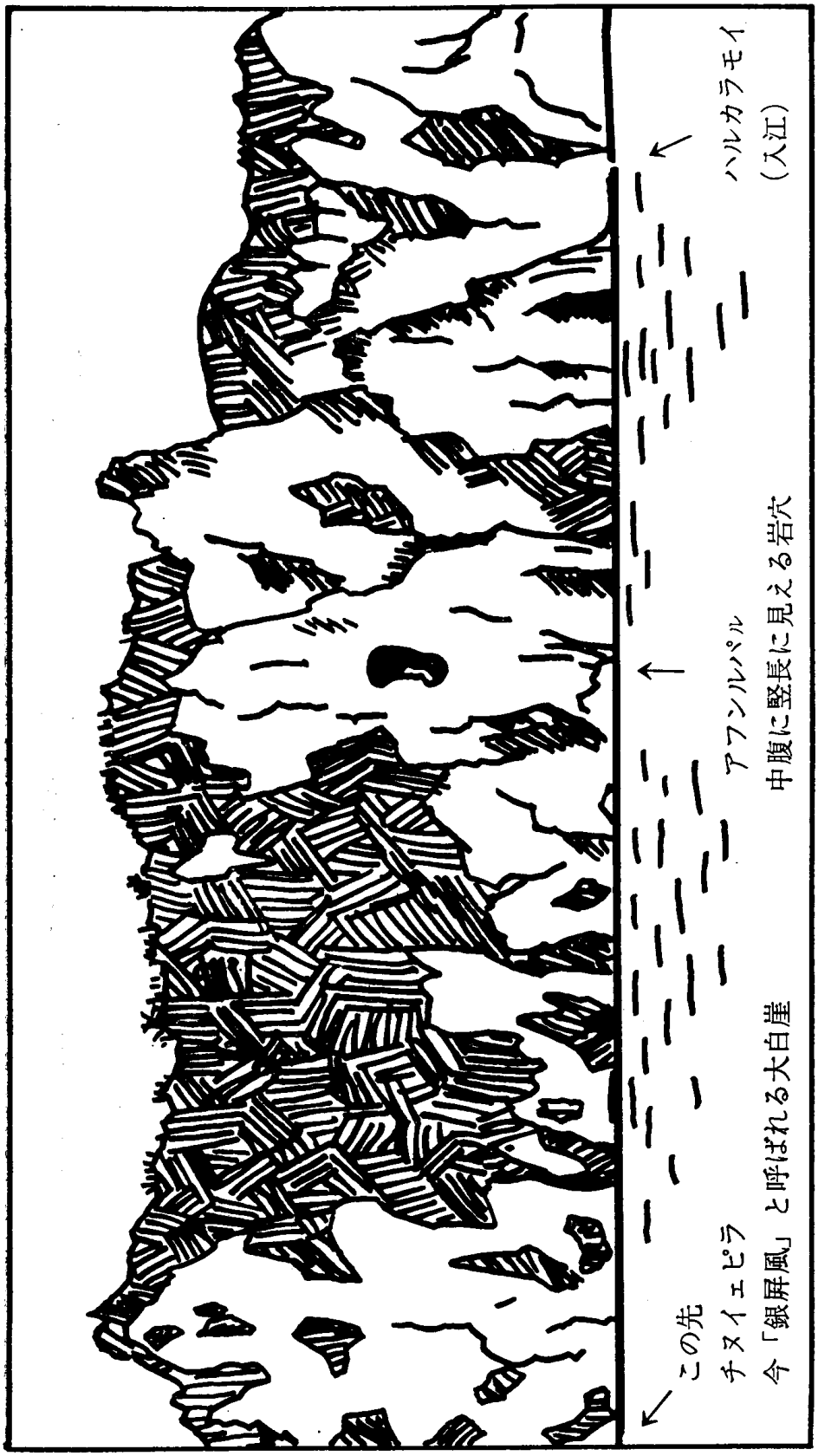
＊ かゝる地名は，北海道各地の海岸や川岸の洞穴に付されて，多く存在する。

＊ ① Ahun ru paro 地獄穴（渡島国亀田郡）（永田方正「北海道蝦夷語地名解」）p. 129.

＊ ② Ahun ru paro 地獄の口，直訳，入ル路，口，此穴ハ「トキカラモイ」ト「オシコ



アフンルパル(登別町) 登別町の知里高吉翁(知里博士巌父)が、幌別町との間のリ・フルカ(高い丘)にアフンルパルがある、死者が出入すると伝えられ、子供等は近くに寄らせない所だったといわれた。(昭和30年頃)崖の横穴だろうと思ったがとにかくついて行った。意外にも、丘上の平地にある凹地である。灌木が平地の高さまで繁っていたので、出直して十人位でそれを刈り払って見たら、上図の姿が現われた。少し長目の摺鉢形で六、七段の階段がめぐっている。長径29.5m、短径22m、深さ4m前後。明かに人工のものであった。極めて珍らしい例である。(山田秀三氏図並びに文)



アフンルパル（室蘭） 室蘭の外洋側は目のくらむような断崖の続きである。アイヌ系の老船頭に案内して貰って、舟で見て回った時に、崖の中腹の岩孔を指さして、あれがアフンルパルだと教えてくれた。昔はもっと大きかったが、岩が崩れて小さくなったという。アイヌ時代には、室蘭内港側のアフンルパルと通じていると信ぜられていたのだそうだ。（山田秀三氏図並びに文）

ニ」ノ間ニアル「アフンルーパロ」ニ貫通セリト土人云フ。

（胆振国室蘭郡）（永田方正―前掲書）p. 168.

＊③ O-pokna-ru-paro（釧路）海岸の洞窟（知里真志保―「アイヌ地形語彙）

道南日高の沙流川 Sar-pet の川筋では，沙流川川口の富川（旧名佐瑠太（さるぶと） Sar-putu〈沙流の川口）のやや下手の右岸の崖にある洞穴もやはり，Oman-ru-paro の名で呼ばれていたが，後土砂崩れで埋まってしまった。更に上流の二又から沙流本流に入って，長知内（おさちない） O-sat-nai（〈川尻，乾き涸れた小川）部落の上にも，Oman-ru-paro がある。長知内部落のものは，富川のものより小さい。

＊「キソオマップの付近に底無しの穴と言はるるあり。夏は涼風を吐き，冬はその周縁の雪を融かし，石を投ずるもその音暫く止まず，幽かに遠く縷韻を曳いて消え行くが如しと。……(中略)……曰く地下にポキナシリてふ一社会ありて，この世に生を畢へたるものは必ずここに赴き，ポキナシリに死したるものは，更に下層の一社会に行き，三度死し，最底の世界に堕ち，現世に甦るなりと，この穴は第一層たるポキナシリに通ずるオマンルパロ（冥路口）たるべしといへり。」　（平取外八箇村誌，1920）

〔他界行説話〕 かかる洞穴には，幾多の伝説が伴うであろうことは想像に難くない。故意にか，或は知らずしてか，或は道に迷った挙句にか，かかる洞穴に入って，「死者の国」へ赴いて，そこで自己の配偶者に遭ったり，親や子に会ったりし，また，そこへの途中，若しくは帰途で，新たに死んで他界に赴く親戚，故旧，村人に会ったりするという話を伝えているのである。

J. Batchelor は *The Ainu and thir Folk-lore*（1901）p. 570–574）で，三つの他界行の説話を記載している。筆者にもこの種の説話の採集が幾つかあるが，その中三つの説話の要約を次に示すことにする。

〔第1話〕 昔，サルプト近くの或る村に妻に死なれ，毎日悲観して臥てばかりいる男があった。或る日，気晴らしに，海岸に出て見ると，亡妻が昆布を拾っていた。男は妻の名を呼びかけつつ恐れて逃げる妻の後を追い掛けた。女は川岸の横穴 oman-ru-paro に入っていく。男もすかさず穴の中に入って追う。初めのうちは，穴が狭いので四つ這いになって進むうち，穴は広くなり，次第に行く手が明るくなり，明るい所へ出た。美しい小川が流れ，川沿いに村が見える。女は村の或る1軒の家に入った。男がよく見ると，それは ＊自分の家であった。

男も続いて家のなかへ入ろうとすると，イヌ seta が出て来て吠えかかる。噛み付かれるのは怖いながら，辛うじて妻の着物の裾を捉まえたと思った途端，妻はぱったり転んで，そのまま息が絶えてしまった。すると屋内から……“巫女を呼んで来て，息を吹き返させろ。外へ来たのは妖怪 kamiash だから悪い食物 wen-haru-（魚の骨・尾・鰭

・ヒエの穂など，悪魔払いに使われるもの）――を撒き散らして逐つ払え”という声がしたと思ったら，穢い食物を男めがけて投げつけて来た。それが着物に付いてなかなか離れない。止むなく，男は，妻の蘇生する様子を見ながら逃げ出し，先の洞穴から出て，家に帰って来たが，爾来悲観して毎日臥てばかりいた。（日高・二風谷―二谷国松氏伝承）

* 妻が死んだので，家を焼却して，家の霊を他界へ送ったことを暗示している。

〔第2話〕 ある女が，誤って，サルプトの oman-ru-paro に落込んだ。入口は暗く小さかったが，行くに従って，中は段々広くなり，やがて明るい世界の広い道へ出た。歩いていくと，何時の間にか，自分の村によく似た村がある。そこに正しく，*自分の家と思われる家があったので，中を覗くと，亡き両親がいて，娘をさし招く。驚喜して駈け入ろうとしだが，何かに躓いて転倒して気を失ってしまった。……通りすがりの女が彼女を見付けて，手当てを加えたのは oman-ru-paro の傍であったと……と後になってその女が物語ったと云う。（二谷国松氏 伝承）

* これもやはり，死者の出た家を焼却する習俗を想わせる。

〔第3話〕 胆振の有珠か虻田辺の人が，交易へ出掛けた帰途，とある海岸の洞窟から「死者の国」へ迷い入っての見聞を村に帰って村人たちに語ったという実歴談 iso-itak。

夫婦船に相乗りで，和人の町（松前或いは津軽の十三潟辺）へ交易に行っての帰途，或る日海岸に崖の聳える小さい砂浜に船を曳上げて野宿する。流木を拾い火を焚き，夕飯を炊きながら，ふと見ると，沖の方から大津波が押寄せて来る。夫妻手を携えて崖の崩れたところを逃げていくと，行手に横穴が見える。その穴へ入っていくと，初めは暗かったが，行く中にぼんやり明るくなって来た。足にまかせて進むと，やがて景色の綺麗な所へ出た。道の傍に人家が建ち並んでいるのが見える。村の海岸では今しも弁財船 penchai（大形の和船）が港へ入ろうとし，村人が大勢集まっている。なお，行くと，村はずれに，他の家とは，少し離れて，ぽつんと建つ一軒の家がある。夫婦がその家の前に立って咳払い shimushishka して待っていると，中から主婦らしい女が現われて，“早くお入り”という。中へ入ると，この家の主人は如何にも首領らしい立派な人柄の男で，夫婦に向かって鄭重に初対面の挨拶をした。そして，“どうして此処へ来たか”と訊ねたので，男は，今までのことを残らず話すと，主人は“俺たち夫婦も汝たち夫婦の様にして此所へやって来たが，ここは死人の来る国だ。ここへ来たら決して食物を食うな，俺たちは，うっかり食べたばかりに，もう元の世界へは戻れなくなってしまった。この世界では決して食べ物を食ってはいけないぞ。食わなければ，また元の世界へ帰れるのだから。空き腹でもあろうが，気の毒でも何も食べさせてやる訳には行かない。俺たちは，この世界にも沢山いるシカやクマなど獲つて暮らしている。ここには汝たちの知っている死人たちも，沢山来て，村を造って住んでいる。生きている私たちや汝たちには，あの人たちの姿は見えるが，向こうでは見えないのだ。上の世界（人間界）で生前使

っていた物は，何でも，この下界へ持って来て，使って暮らしている。でも，俺たち夫婦の様に肉体を持って，この世界へ来た者は，他の人々（死者）と一緒に暮らすわけにはいかないから，こうして，村人たちとは，ぽつんと離れて暮らしているのだが，再び人間界へは戻れないから，死ぬまで，このまま暮らすより仕方がないだろう。こんなところに永居は無用，急いで帰ったがいい。汝たちに砂浜へ船を寄せさせたのも，沖から津波が押寄せて来るように見せかけて，この下界へ来させたのも，皆魔神の仕業だ。元来た通りの道を引き返えせば，砂浜の上に汝たちが引上げた船もそのままあるだろう。それから俺たちの獲ったクマの皮やクマの胆など沢山土産に上げるから，人間界へ持ち帰って，それを証拠に，俺たち夫婦に下界で会ったことを話してやって欲しい”といった。夫婦は，土産を背に，別れを告げ，元来た道を引き返して来ると，横穴の途中で，顔見知りの村の老爺が燧袋 karop を背負って，向かうから来てすれ違った。こちらの姿が見えなかったのか，そのまま通り過ぎて行った。また1人の老人が袋を背にすれ違う。これもこちらには気付かない。

砂浜へ引き返した夫婦は，船に乗り，途中所々に泊って，自分たちの村へ帰った。村人たちに「地下の国」で見て来た一仔一細を物語った。村人の話では，夫婦が帰途横穴ですれ違った老人たちは，いずれも葬式をしてまだ余り日が経たない人たちだったことを知って驚いた。……(中略)…夫婦は肉体を持って「地下の國」へ止まる人たちへは普通の死者にする供養 shinnurappa も出来ないが，余りにも可哀相なので，せめてその話だけでもして慰めてやろうと，人々に語り広めたという。

（日高・荷菜，平目カレピア媼伝承）

J. Batchelor の “*The Ainu and their Folk-lore*” (p. 570-574) 所載の他界行の3説話の筋は，次の様である。

〔第1話〕 或る男が洞穴から下界の「死者の国」へ赴き，そこで会った自分の村人に話し掛けても，こちらの姿は見えないが，声だけは通じるらしく，皆迷惑がり且つ恐れる様子であった。彼の父さえ彼の姿が目に入らず，彼の母も恐れて逃げ去る。下界の人々は，彼を幽霊 *ghost* だという。犬に吠え立てられて，急いで上界へ逃げ戻る。帰途，洞穴の途中で，彼の友人らしい者が病み疲れた姿で，袋を背にして下界へ赴くのに会う。

彼が話し掛けると，恐れて下界へ逃げ去った。村に帰ると，彼の留守中，友人の一人が死んだという噂を聞いた。下界への途中で会ったのは，その友人の霊魂であったと知った。

〔第2話〕 或る男が下界へ行くと，犬に吠えられる。その男の亡き父母も村人たちも，犬の声を聞きつけて，家から出て来る。木幣 inau を作り，食物の残りを東窓から出して，その男に投げ付ける。その男が怒って，蹴飛ばしても，懐ろの中に飛び込んで離れない。人間界へ逃げ帰って来ると，初めて，他界の汚ない食物は，その男の身体から離れ

た。

〔第3話〕 或る男が旅に出ての留守中，父が死んだ。その男が帰って来ても，兄は父の遺言に背いて，弟に譲るべき遺産を私して，渡そうとしない。意を決した弟は，父の遺言を確めに，下界へ赴く。下界の村に着くと，犬に吠えられ，村人からは幽霊として追い払われる。

父の家に入って行って，父に話し掛けても，一向に通じない。そこで，その男は，一計を案じて，傍にいた或る男の心中に入り，神懸りさせ，その口と舌とを藉りて，自分の問わんとする所を亡父に通じさせ，父の遺言を聞いて，上界へ帰って来た。そして兄から自分の頒け前を取り戻した。

〔他界行説話の分析〕 以上の諸説話を通じて，我々がアイヌの他界観に就いて知り得る点は，次の諸点である。

(1) 現世の人々も，決意次第で，生存中に，「死者の国」を訪れることが出来る。

(2) 現世の人が他界を訪れると，こちらには彼等の姿が見え，その言葉も聞こえるが，彼等にはこちらの姿も見えず，声も聞こえない。

即ち幽霊 *ghost* 若しくは妖怪 *monster* として扱われる。（下界の者が幽霊若しくは妖怪として上界を訪れ，夢の中に現われるのと同じ。）

(3) 現世の者は，他界に於いては，幽霊若しくは悪魔，妖怪として観ぜられるが故に，犬に追われ，或は「魔神 nitne-kamui 用の木幣 wen-inau」を供えられ，汚穢の食物や食べ残り等を投げ付けられたりして放逐される。これは，この人間界で行なう「悪魔祓いの儀礼」と同じである。

(4) 現世の者が他界へ行った場合，それは幽霊としてであるが故に，他界の人に意志を通じる唯一の方法は，他界の者（巫女の死者）に憑依して，之を神懸りの状態に陥し入れ，その口を藉(か)りて託宣することである。これは，人間界で，神々や死者が，人間に託宣するのに，巫女 tusu-menoko, nupur-mat の口を藉りるのと同様であること，言うまでもない。

(5) 現世の者が他界を訪れた場合，他界で食物を食べること即ち黄泉戸喫(よもつへぐい)の禁を犯せば，人間界には戻ることが出来ないという考え方があること。そして，この禁を犯した者は，元々生者として他界に赴いたものであるから，死者の人々の仲間には入れず，他からの交際を絶たれ，隔離された悲惨な状態で，その生を終えるまで，下界に止まらねばならぬという考え方である。この説話のモチーフ *motif* は説話学 *folk-lore* の所謂 *Journey to Hell type*（冥府道行き型）に，しば

しば現われるもので，日本神話の伊弉諾尊が黄泉国（よみのくに）を訪れる説話やギリシア神話で，冥府の王 *Hades* に奪われた娘の *Persephone* が，冥府でザクロ（柘榴）の実を食べてしまったため，母の *Demeter* の許へ帰れなくなって，*Hades* の妻となり冥府の女王となった説話などと共通するものがあることは言うまでもない。

* E. H. Blakeney: —— A Smaller Classical Dictionary, 1923.

松村武雄：——神話学原論（上下），1941.

〔従来の諸文献に見られる「アイヌ」の他界観〕 金田一京助博士のアイヌの他界についての考察は「アイヌの研究（1940, 八洲書房）p. 301-6」，「採訪随筆（1937, 人文書院）p. 163-174」等に窺われる。簡単ながら，アイヌの宗教の核心に触れていられる。

最も詳細な記述は J. Batchelor の著書に見られる。英文で書かれたものだけに *Encyclopaedia Britannica*, その他の百科辞典などにも引用されていた。

"Hades, or the intermediate state, is called ***pokna moshiri***, 'the under world', or 'the world below'. All spirits go first to this place when they leave the body. Hades, however, is not generally believed to be a purgatory, though some think it may be; but upon going there the spirits which are always spoken of as possessing a body exactly like the present one (though whether it is of a spiritual or material nature is not stated), are told to which division of the place they must go, whether to the place of the just or the wicked.

In the center of Hades there are said to be three roads. The first leads from the earth upon which we live, and which the Ainu call, ***Kanna moshiri***, 'the upper world.' This road goes to the center of Hades. All spirits go by this road when they leave the body. The second and third road start from the center of Hades, one leading to heaven and the other to Gehenna.

All along these roads there are watch-dogs stationed at different points to direct the spirits on their journey, and to see that none go into the better world clandestinely or in a surreptitious manner.

As soon as the spirit from the 'upper world'——that is, our earth——passes down to the centre of Hades, a watch-dog informs it that has received a message from the Creator, sent through the goddess of fire, as to where it is to go. If it has done good during life it passes along the road to heaven at the doors of which gods and men meet it and lead it inside.

If the spirit belonged to a person who did evil during life, it is informed that,

a message having been received concerning oncerning its evil deeds, it has now to proceed to Gehenna for punishment. Should the spirit deny having done any wrong, the goddess of fire is summoned, and she causes a great picture, representing the whole life of the spirit, to be placed before it.

Thus the spirit stands self-condemned, and there is no escape, for the fire goddess has a perfect picture of every word and act the spirit ever said or did while in its body upon earth.

Gehenna, or hell, is called *Teinei-pokna-shiri* and that means 'the wet underground land.' The wicked are punished in this place. As to what these punishments consist of, the Ainu are not all agreed. Some say that the spirits which go there will be wet, unconfortable, and very cold for ever. Another idea is that they will burn for ever in the fires which exist in the centre of the earth: thus some will be for ever cold, and others for ever hot."

John. Batchelor:——The Ainu and their Folk-lore (Chapter XLIX, p. 568-9)

J. Batchelor に依れば，Pokna-moshiri* (*Hade*) は「神の国 Kamui-moshiri」（筆者が上に引用した英文の前に，それに就いての記述があるが，引用することは省略する。—ここは多分この世界の地下遠い所にあるが，神々の *special home* がある所で，人間の生前，善行のあったものも，ここに，神々と共に住み，永遠の生活を続けることが出来ると記るしている。)——と Teinei-pokna-moshiri (*Gehenna*) との中間的の国 intermediate で，あらゆる死者の霊はまずここ——Poka-moshiri—— に行く。

この世界の中央から道が通じ，(1) は人間の住む「上方の国 Kanna-moshiri」へ，(2) は「神の国」へ，(3) は *Gehenna* なる Teinei-pokna-moshiri に通じている。各道には，各要所に番犬がいて，死者がごまかしや不正なことをして，よりよい世界へ行くことがない様に監視する。この犬どもは *Creator*（造物者）からの *message*（通達）を受けて，死者にそれぞれ行くべき所を指示する。

Creator は死者の生前に於ける行為を *Goddess of fire*（火の女神）から詳細に報告を受けている。善行を為した者は，Kamui-moshiri (*The kingdom of God*) に行き，Kamui-kotan (*The place of God*) に住み，悪業を為した者は Teinei-poka-moshir (*Gehenna*) に赴いて，処罰 *punishment* を受けねばならぬ。若し死者の霊が，悪業をした覚えがないとして Teinei-pokna-moshir (*Gehenna*) に行くことを拒否すれば，「火の女神 *the Goddess of fire*」が召喚される。「火

の女神」は，生前の行為を一切描写した絵巻を展げて見せるので，死者の抗議は一切成立しないという。そして，Teinei pokna-moshir については，アイヌに2説あって，その（1）は永遠に寒冷な所であるとするもの，（2）は地球の中央にある熱火によって焼かれる所となすものとであるという。

* J. Batchelor：——*The Ainn and their Folk-lore, 1901*

〃　　：——*Ainu and Lore, 1927*

前北海道大学教授名取武光氏も，夙に，①雑誌「ドルメン」（VoL. 3-4, 1934年4月）の「アイヌ土俗品解説」，②「東亜民族要誌資料第二輯」（1941）中の「死・埋葬・墓制」の項，「噴火湾の捕鯨」（1942）中の「アイヌ土俗品解説」等で，アイヌの他界観に就いて，かなり詳細な記述があるが，無批判に，上述の J. Batchelor 説を襲用されているかに見える。

〔筆者の見解〕 筆者は J. Batchelor の記述をそのまま鵜呑みにし，これをアイヌの考え方として承認するには，尠からず危惧の感を抱かざるを得ない。

先述の如く，他界に於ける死者の生活は，現世の生活の連続なるが故に，Aの村人は，他界に於いても，Aの村人同志で生活する。或る一つの川筋に棲む人々——例えば沙流川筋の沙流人 Sar-un-kur，鵡川筋の鵡川人 Muka-un-kur——は，その人たちだけで聚落を作って棲み，更に人間界の大集団である十勝人 Tokapchi-un-kur は，十勝人だけで，日高人は，日高人だけで集団を形成して棲んでいなくてはならぬことになるが，実際，その様に合理的に断言するアイヌの故老も尠くないのである。

東京大学の *泉靖一教授も，

「沙流川のアイヌは Sar-un-kur iwor の地下に，現世の Sar-un-kur iwor があり，死後，彼等は，来世の Sar-un-kur iwor に赴くものと考えている」とこの事実に注意している。

* 泉靖一：——「沙流アイヌの地縁集団におけるIwor」（民族研究VoL. 16-3-4, 1951, 3）

筆者の調査に依れば，pokna-moshiri, は死者の行き着く所であって，*J. Batchelor* の所謂 kamui-moshiri, kamui-kotan に当たる所であって，他の二世界へ行くための，死者の霊の一時的集合所乃至贖罪所 *purgatory* とは考えられない。死霊が犬 seta を見て恐怖して逃避することは，アイヌの説話には，多数例を見出だすことが出来るが，仏教でいう閻魔　*Yama-raja* の庁に於いて，王の部下たる冥官や獄卒が地獄 *Naraka* に堕ち行く者どもを，浄玻璃の鏡に照らして，前生の善悪を知り，一々帳簿に記るし，罪人の赴くべき所を定める様な役を演ず

るものとは考えられない。

名取教授は *Batchelor* の記述中にある "*Creator*" を「創造者」の訳語で用いているが，この概念を明かにしていない。*Batchelor* の所謂 *Creator* を文字通りに「天地創造の神＝造物者」と解すれば，アイヌ神話に於いては，Moshir-kar-kamui（Kotan-kar-kamui「国造神」とも呼ぶ）のことでなければならぬ。若し，之を全宇宙を創造し，神々を主宰する神例えば，キリスト教の *Jehovah* の神の如く——と解すれば，その様な神が，「死者の国」まで支配することは，当然あり得る訳だが，既述の如く，アイヌの神観に於いては，全宇宙を統治し，神々を統轄する様な神は存在しない。かかる神観は，人間の国土を総支配する人間の王者（総酋長）がないという社会構造の反映であろうことはいうまでもない。

又「火の女神 Kamui-huchi, Ape-huchi」が死者の生前の言動を知悉していることは勿論であるが，仏教で浄玻璃鏡が死者の生前の行為を照破するかの様に，「火の女神」自らが，死者生前の行為を示す絵巻物を展げて死者の抗議を許さないという冷厳な役割を果たすという様な考察も，アイヌの考え方の真相を誤解していると想う。「火の女神」が，死者を他界に送る儀礼即ち「葬制」に於いて果たす役割に就いては，玆では省略するが，*J. Batchelor* や名取教授の様に解することは当を失するものであろう。

J. Batchelor の記述も，恐らく，アイヌの故老の説に基づくものであろうが，キリスト教的要素や仏教的要素を余りに多く持ち過ぎてはいないだろうか。

J. Batchelor は，(1) 人間の国 Ainu-moshiri, (2) 神々の国 Kamui-moshiri, (3) 死者の先ず行く中間的世界 *Intermediate state* 即ち Pokna-moshir（一時的死者の集合所で，ここに永遠に住む死者はいない。），(4) 地獄 Teinei-pokna-moshiri（罪人の堕ち行く世界）という四つの世界を考えているが，筆者の考えるところに依れば，アイヌの神々には，(1) 人界 Ainu-moshir に於いては，人間と共存共栄する神即ち「火の女神 Kamui-huchi」「水の女神 Wakka-ush-kamui」，「クマの神 Kim-un-kamni」の様な神々と，(2) 天界 Kanto（*heaven*）にのみ居所を持つ神，例えば「蒼天の神 Shinish-kor-kamui」，「国造りの神 Kotan-kar-kamui」「雷神 Kanna-kamui」，「太陽神 Chup-kamui」等の如き神々とある様である。Kamui-kotan（神の村）乃至 Kamui-moshir（神の国）は，地上 *earth* にも天界 *heaven* にも存在することになる。常人の赴く死者の国 Pokna-moshir は，この人の世そのままを写象した世界なるが故に，ここも神人共に栄え行く世界である。

又，罪を犯したものの堕ち行く，最下底の地下にある「陰湿の下界 Teine-po-kna-moshir」は，神々でも悪業をなしたものが堕されて行くところであるから，ここも神人共棲の世界でなくてはならぬことになる。「陰湿の下界」へ落ち行くことは，神の神らしからぬ行為，人間の死者の生前の悪業によって決定される。

アイヌの伝承し来たった「神謡 Kamui-yukar（自然神の神話）」「聖伝 Oina（人文神の神話）「神々の昔話 Kamui-uwepeker」など見れば，神々自身その非を悔いて，自発的にそこに赴く様にもいわれているし，他律的にも堕し入れられもする。殊に，人間にあっては，葬送の際に，長老の行なう「死者への告別の辞 iyoitak-kote-itak」そのものが決定的な力を持つものではないかと想われる。

人を殺したり負傷させた後，人に捕獲された妖熊は被害者を蘇生せしめ，若しくは治癒せしめないならば，その悪霊は，人間の呪辞に依って，そのまま「陰湿の下界」へ堕ち行く様に運命づけられるし，善神や「人間の始祖神 Aeoina-ka-mui, Ainu-rak-kur, Okikurmi」と戦って破れた魔神や敵の神も，そのまま六重の地底なる陰湿の国へ踏み落とされるものの様に物語られているのである。

〔終わりに〕 アイヌの宗教観特に他界観に関する前人の考察報告は前述 *J. Batchelor* を除いては，ほとんどなされていない。筆者の本論考は，1949-1953年に亘って実施した北海道各地方の現地聴取調査資料と，それ以前に採集した伝承文学資料に基づくものであることをおことわりして置く。未解決な面，誤った考察も多々あろうと思うが，将来の研究に俟つことにする。

なお，本論考は煩瑣と思われるほど，アイヌ語が多く出て来るが，遠からず滅び去るであろうアイヌ語の記録として残して置きたかったからである。一部の英語はイタリック体活字を用いて，アイヌ語と区別した。挿し絵はアイヌ地名研究の第一人者山田秀三氏を煩わした。御好意に感謝申上げる。

（1970年3月10日）